

Title	現代中国の政治経済学
Author(s)	山本, 裕美
Citation	中国と日本の政治経済学：河上肇記念シンポジウム報告書 (2005)
Issue Date	2005
URL	http://hdl.handle.net/2433/39631
Right	
Type	Conference Paper
Textversion	publisher

張卓元（1933-），元社会科学院經濟研究所所長。

王振中（1949-），社科院經濟研究所副所長，資本論研究会副会長。

錢 津（1951-），資本論研究会副秘書長

左大培，新左派經濟学者（西方經濟理論研究室）

八木：ありがとうございました。大西教授からは、特に中国の中でのマルクス経済学は現在どういう状況なのかということをご説明いただきました。それでは今度はつながるようなかたちになるのではないかと思います、山本教授にお願いいたします。

山本：山本でございます。中国の政治経済学ということで報告させていただきます。私自身は中国経済を専門にしております、方法論的には開発経済学あるいは経済発展論とよばれる、いわゆる近代経済学の一部門をデシプリンとしています。従いまして、なぜ私がこの場にいるのかというのは、多少私自身違和感があるわけですが、もちろん私の世代は、やはり経済学といえば経済原論でもマルクス経済学と近代経済学が並立する時代でございます、もちろん私自身も友達と『資本論』を一緒に読んだり、あるいは『資本論』の講義を受けたりしたこともあります。しかし現在は近代経済学の立場に立って、中国の経済、特に農業問題を研究している者です。

今日ご報告したい点は、どれだけ話せるか時間の関係もあって分からないですけども3つほど申し上げたいと思います。

まず、私自身そういう立場にありますので、どちらかといいますと中国の近代経済学の導入史とかそういうところに非常に興味がありまして、まずⅡにあげました「近代経済学とマルクス経済学」ということですが、その1で「北京大学教授達の経済科学工作に関する意見書」というものに関してご報告したいと思います。これは、もっと正確に言いますと、その下に書いてありますように、「当面の経済科学工作に関する我々の幾つかの意見」ということで、この意見が載っている本がそこに書いてありますように、資産階級社会科学復壁に反対するという本が1958年に出ておりまして、50年代、いわゆる中国は49年に毛沢東が中心になって新中国を建設するわけでありまして、そのあと世界に散らばっている、特に欧米、日本で学んでいる大学、大学院、あるいは大学のスタッフ、そういう知識人を中国に帰国させて中国の建設に当たらせようということで、そういう大運動を展開したわけでありまして、ここに挙げます陳振漢とか以下6名の人のうち3名の人が陳振漢教授初め北京大学の教授でありまして、あと3人のうち政府部門が谷氏と寧氏という人、それから巫宝三は当時中国科学院の経済研究所の研究員でありました。

この意見書はそこに書いてありますように、いろんなことが書かれてあるわけで、先ほ

ど大西教授が言われましたけども、現在はマルクス経済学が押されているという状況ですが、この時点では全く逆でありまして、マルクス経済学が主流になって、近代経済学が抑圧されているという時期に当たっております。いわばこの6人の人たちは欧米に留学しておりまして、何とか近代経済学を中国の経済科学工作に役に立てたいという観点から意見を出したわけでありまして。

その第1点として、ブルジョア経済学の批判的摂取問題。ブルジョア経済学は社会主義建設のためには全然役に立たないから葬ってしまえということではないでしょう、といういわば反対の意見ですね。いわゆるブルジョア経済学であっても取るべきは取れど。例えばそこに書いてありますように、もう全文は読みませんが、ケインズの乗数理論とか限界概念というのは、分析ツールとして非常に有効なのではなかろうかということも言っておりますし、統計学に関しましても、選択理論、これはちょっと照合していないのでどういうことを言っているのか分からないのですが、その後ちょっと考えましたらどうも標本の抽出理論のことを言っているようです。選択理論というよりも標本抽出理論という方が正確かも分かりません。あと正規曲線とか時系列とか相関関係とか、こういう統計学の方法概念があるけれども、これも社会経済現象に役立てるのに有用な概念ではなかろうかということも言っているわけです。原文自体を陳振漢教授が起草しまして、あとの5人が書き込むというようなかたちになっておりまして、都合、この意見書は3次稿までありまして、3回訂正が行われてだんだん主張がトーンダウンしていくという、その時の政治情勢によりましてそういう状況が読み取れるわけですが、ここに翻訳したのは第1次稿であります。その最後のところがちょっと日本語としては変になっております。「また資産階級のものには草木皆兵の感があり」ということですが、草木皆兵というのは、戦争をやるときにどうも草も木もみんな兵隊に見えるという脅威を感じるというような意味でありまして、「一切の学問は接する前に草木皆兵の感がある」と。社会主義にとってブルジョア経済学は危険だということです。「草木皆兵の感があるとして」、「あるというのは」というのはあまりいい訳ではありません。「あるとして一筆で抹殺するのはどうであろうか」というふうに訂正したいと思えます。

それから2番目の問題としまして、如何に経典著作に対するかという問題で、これはもちろんマルクス経済学に対する問題点というのを投げかけたわけでありまして。「現在の空気は経典著作の一字一句を全て金科玉条となし、引用解釈するだけで逐次逐語を述べ、暗誦し、あるいは注釈訓詁を施し、甚だしきは排校の誤りあるいは翻訳上の誤りも全て詰屈聱牙（きつくつごうが）の訳文」ということですね、これは中国語ですけども日本の広辞苑で調べましたらちゃんと載っております、昔の日本人は使っていたようです。文章がごつごつしてマズイ文章であるという意味に使うそうであります。「詰屈聱牙の訳文であるとして神としてこれを敬うならばどこで精神の実質を会得できようか」ということがありまして、その最後のほうを読みますと、「しかるに我々はここにおいてどれくらいの年月誰も絶対貧困論（マルクスの絶対窮乏論ということですが）に対する疑問を公開提出しな

かったのだろうか」というふうな、マルクス・レーニン主義の文献なら全て神のごとく敬うという態度はいかなものかという批判を展開しているわけです。

これがために結局、毛沢東は「百家争鳴、百花斉放」のスローガンの下に知識人に、中国の建設に役立つためならどのような意見でもどンドン言えと、ハツパをかけたのですが、一度そういうことを言ったら、今度は毛沢東の思想に合わないということで断罪されるわけです。右派の誤りを犯しているということで、反右派闘争というのを毛沢東は起こしまして、知識人のほとんどがそれに引っかかってやられてしまったということでもあります。

特に巫宝三につきましては、東京大学の社会科学研究所に田嶋俊雄教授という、私の友人でありますけれども、同じように中国の農業問題を主として研究している教授がおりまして、彼から私信をもらいまして、ちょうど彼が東大から休暇をもらいまして北京の経済研究所に滞在したことがあるわけですが、その時に巫宝三先生が亡くなられたということでお葬式も出席されたということで、1999年2月1日に巫宝三先生は亡くなっておられます。田嶋さんは追悼録も書いておられまして、それも送って頂いたのですが、それによりますと、この巫宝三先生はハーバード大学留学組でありまして、先生はシュンペーター教授であるということで、1933年の中国の国民所得を推計したものを博士論文にされているそうでもあります。しかし巫先生はその後批判されまして、どうも研究分野がそういう現実の中国経済を研究するというよりも、いわば逃避だったのかもしれませんが中国の経済思想史、特に古代の思想史のほうに研究を転換されたようでもあります。田嶋教授がおられた時に中国も開放・改革でいわゆる国民所得、ソ連の方式にならった物財バランスによる推計じゃなくて、自由主義国・資本主義国が採用している、日本ももちろん採用しております西側の国民所得推計の方法に転換するというのが現に行われているわけがありますけれども、田嶋教授が巫先生に向かって、「先生の時代がきたのではありませんか」というふうなことを言ったら、巫先生は、「もう年だからそういうこともできない」と寂しそうに言っておられたというエピソードを田嶋教授から直接お聞きしております。

同じ北京大学の総長でありました馬寅初教授も受難しております。同じように彼の「新人口論」という論文が57年7月5日の『人民日報』に全文掲載されたわけではありますが、彼はこの論文で中国の人口を今や抑制すべきだと、経済発展のためには抑制すべきだと主張したところ、毛沢東は人手が多いことこそ経済発展の基だということで、バツサリ斬られまして、中国のマルサスと批判されまして失脚したわけでもあります。

詳しくお話したいのですが時間もないので端折りますが、馬教授は長生きをしまして、1979年に名誉回復されて、北京大学名誉総長になりまして「新人口論」も出版されて、99年に全集も出版されました。ところが私個人からいいますと非常に興味があるのは、馬先生は文革で失脚している時に100万字にのぼる長大論文を書かれて、それが何と中国の農業に関する大論文だったというのですが、これは馬先生の伝記を読みますと、ある日突然紅衛兵が自宅に乱入してきまして、その100万字の原稿を燃やしてしまったということで、それしかなかったわけですから永久にその原稿は失われてしまったわけです。私と

しては個人的に馬先生がどのようなことを書かれたのか知りたいところであります。

3番目にいきまして、現代中国の経済改革に影響を与えた経済学者達ということで、薛暮橋という人がおります。この人は96年に『薛暮橋回顧録』という分厚い本を書きまして、これを私は読んでおりました。薛暮橋という人は79年に『中国社会主義経済問題研究』という本を出しまして、中国の78年から鄧小平が始めた改革・開放の政策の理論的な基になるような書物であります。この回顧録によりますと、都合1000万部売れたそうであります。これは大ベストセラーであります。この人は、河上肇との関係も書いておまして、この世代としてはやはり河上肇の本を読むということが多々あるわけございまして、27年監獄に入っておまして、回顧録ではその時に河上肇の『資本主義経済思想史』という本を読んだと書いてあります。ところが三田さんのこのリストを見ますと、こういうタイトルの本はありませんで、おそらく27年に読んだとすれば『近世経済思想史論』という本ではなかろうかと、中国でもこういうふうには翻訳されているわけですが、これは薛暮橋先生の間違いではないかと思えます。それから32年に『経済学大綱』という本を読んで学習したと。彼は日本語も勉強しておまして、上海に当時あった魯迅が入り出した書店で有名な内山書店、ここは上海の左翼文化人のサロンになっていたわけですが、ここにも出入りして日本語の本などを買っていたということでもあります。

彼は、大学はもちろん出ておりませんが、「農村経済研究会」という組織に参加しまして、この研究会を実質的に組織しました陳翰笙という人が先生であります。陳翰笙の経歴は後のほうに書いてあります。同じ江蘇省無錫の出身でありまして、シカゴ大学とかベルリン大学に留学しまして博士号を取った人です。ここには書いてありませんけれども、彼は最近研究書がかなり出てきております太平洋問題調査会という Institute of Pacific Relations、通称 I P R といわれておりますアジア・太平洋地域の平和を願ってできた、いわばNGO的な組織であります。もちろん日本からも松方三郎とか牛場友彦とか浦松佐美太郎とか、日本の三銃士といわれた人が参加したりして日本も非常に関係の深い組織であります。ここに中国の代表として陳翰笙先生は参加しておりました。

ちょっと端折らせていただきまして、私が非常に関心のある先生ですが、2の杜潤生先生は趙紫陽時代、趙紫陽は鄧小平の左腕、右腕が胡耀邦だったわけですがけれども、先般亡くなりまして、そこに2004年と書いてありますが間違いでして今年の1月17日に亡くなりました。私も非常に高く評価する人物ですが、この趙紫陽政権の下で実際の農業政策を打ち出したのが杜潤生先生であります。私も一度お目にかかりたいと思っているんですが未だそのチャンスはありません。杜先生は83年から87年まで5つの農業の自由化、農業の経営請負制、要するに個人経営まで認める自由主義的な農業政策、農村の自由化を行う基になった共産党の1号文献を毎年起草しており、非常に興味深いものがありました。この杜潤生先生も伝記を読みますと、もともとは鄧子恢という50年代に農村工作部長をやった人の下で、人民公社の前段階の毛沢東の急進的合作化運動を批判しておまして、毛沢東の改革スピードは速すぎるのではないかと、土地改革後の一定期間農民に4

つの自由を与えてもいいのではないかということを手張したわけだ。今でいうと開発経済学のコンテクストから言いますと、毛沢東は非常なショック療法で一挙に政策を実行してきた。どちらかというところ鄧子恢及び杜潤生はもっとゆっくりやったらよいのではないかという、現在の鄧小平の経済改革は漸進主義といわれておりますが、それに近い立場をとったわけだ。結局は毛沢東に批判されてしまうわけだ。大躍進の失敗によって毛沢東が国家主席をおいた時に劉少奇が国家主席になりまして、調整期に入るわけだ。中国の経済に自由化的な要素を持ち込むということで、この二人のコンビは現在の農業政策のもとになる農業生産責任制を実際に導入したわけだ。それをまた毛沢東が権力闘争で文革を起こして潰してしまうということになるわけだ。そういう流れだ。杜潤生先生の経歴を見ましても、特に河上肇の文献を読んだということは載っておりません。

それから最後の社会主義市場経済理論の創設者、顧准と孫冶方ですが、孫冶方は大西さんのレジュメにも載っておりますが、現在は社会科学院の経済研究所を中心に孫冶方賞という中国の最高の経済学者に与えられる賞が作られております。この孫冶方は、出身地も薛暮橋と近いわけで、どうも孫冶方も本名が薛萼果ということで薛ということからすると、薛暮橋と何か関係があったという日本の研究者もいるわけだ。伝記を読む限りではそういうことは確認されておられません。

孫冶方は60年代ソ連のフルシチョフ期の時にソ連経済建て直しということで、ソ連の経済学者リーベルマンが利潤指標を導入して国営企業の活性化を図ろうとしたわけだ。孫冶方も同じようなことを手張しまして、「中国のリーベルマン」という帽子を被されて批判されるわけだ。

現在、中国の社会主義市場経済理論の元祖の1人ということになっております。その最初の論文「計画と統計を価値法則の上に置こう」が56年に社会科学院経済研究所が出しております雑誌『経済研究』に載っております。これはいわゆるスターリンが「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」という1952年に公表した論文から端を発しまして、社会主義経済における価値法則の作用が問題になりました。レジュメに書いてありますように、その論文に後記に、顧准の筆名、呉絳楓という顧准の影響を非常に受けてこの論文ができたということを書いているわけだ。彼は亡くなる前にも呉敬璉、張卓元という学生に対して、自分の論文集を出す時には必ずこれを後書きに書いて載せるようにと遺言をして亡くなったわけだ。しかしながら、彼の死後出た本、あるいは孫冶方全集にも残念ながら後記は未収録になっております。これは孫冶方の人格の高潔さというものを示すエピソードであります。全集にもまだ載せられていない。呉敬璉先生と張卓元先生の責任が問われるのではないのでしょうか。

それから最後に、顧准という人が最近非常に注目されております。彼は、まさに孫冶方より早く社会主義における価値法則の作用というものを論じた論文「社会主義制度下の商品生産と価値法則の試論」を57年の第3期の『経済研究』に載せているわけだ。載せた年次からいうと孫冶方論文のほうが早いわけだ。研究自体は孫冶方が言

っているように、顧准の方が早いわけです。この顧准という人は経歴を見ますと非常におもしろい経歴の人で、大学は出ておりません。それで潘序倫というコロンビア大学を出て会計学の宗師と現在中国で言われており、会計学の創始者と言いますか、その人の会計師事務所に見習いとして入って、そこが学校ももっておりまして、この潘序倫によって育てられた人であります。もちろん国立労働大学に入ったということも書いてありますけども、この人は、1956年にソ連科学院生産力配置委員会と、中国側が黒龍江流域綜合調査というのをやったわけであります。その時に顧准は中国側の専門家として参加したわけですが、この時のソ連の専門家の態度が非常に横柄な態度で、これに憤激しまして論争しました。これが後々、中央政府に密告されまして、それで右派と認定されて批判されてしまいました。

それからもう1度65年にも右派分子として批判されて、労働改造所送りになって、最後は病気になって死んでしまうということで、非常にいい仕事をしたのですが、早く亡くなってしまいました。

業績としては、シュムペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』の翻訳もありますし、ジョーン・ロビンソンの『論文集』にも興味を示しております。現在、彼の遺稿がどんどん出版されておりまして、私たちもやっとそれを入手しまして読んでいるところですが、この編者の陳敏之という人は、まさに顧准の実弟であります。社会科学院の哲学研究所の哲学者であります。いい弟である陳教授は実兄の業績を高く評価したいということで懸命になって遺稿をまとめて次々と出版しているという状況であります。

この顧准に注目しろといわれたのは、実は我々が提携しております復旦大学の日本研究中心、我々の上海センター支所もある所ではありますが、その理事長の鄭勵志先生が日本に来られた時に、孫治方ばかりでなく顧准という人を研究しなさいという示唆を頂まして、それからこの人に注目をするようになったわけであります。

それと最後にもう一言。余計なことかもしれませんが、顧准が働いていた立信会計事務所というのは、上海か京都かちょっと忘れてしまったのですが、集会で名刺交換をした人の中に1人日本人の名刺がありまして、この日本立信事務所というのが出来ておりまして、その元々は上海立信長江会計師事務所有限公司が上海に出来ております。やはりこの立信というのは復活したのではないかという気がしております。それから資料を覗んでみますと色々な発見がありまして、馬先生も国民党を批判して政府の要職、あるいはその後北京大学を追われるわけですが、重慶に行った時にこの立信の会計学校がありまして、そこで馬先生も一時期教えていたという関係も確認されました。やはり何か関係が出てくるな、という面白い、興味ある事実発見した。以上です。

(拍手)

八木：それでは最後に、本山教授をお願いします。